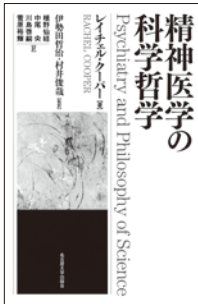


■ 書 評



精神医学の科学哲学

レイチェル・クーパー 著
 伊勢田哲治・村井俊哉 監訳
 植野仙経・中尾 央・川島啓
 嗣・菅原裕輝 訳
 名古屋大学出版会
 本体価格 4,600 円+税

京都学派の創始者である西田幾多郎はその晩年に科学哲学に取り組み、「数学の哲学」や「物理の哲学」について独自の論考を行い、今日もその研究の意義について科学哲学者による検討が行われている。京都学派は哲学の学派に留まらず、経済学や憲法学、歴史学など多くの学術分野を包含するが、京都学派の一分野には精神医学も含まれていることが広く知られている。本書は英国ランカスター大学の科学哲学研究者のレイチェル・クーパーによる“Psychiatry and Philosophy of Science”の邦訳であるが、単に英文書籍の翻訳に留まらず、京都大学の精神医学と科学哲学という分野の研究者による協働により、新たな学際的な研究のあり方を世に問うものとなっている。

本書の第1章の冒頭に読者の対象を「科学哲学者または科学哲学を学ぶ学生、メンタルヘルスの専門家、より一般の読者」としており、まず科学哲学に関する主要な理論を紹介している。科学と擬似科学を区別するというカール・ポPPERの「線引き問題」からトーマス・クーンによるパラダイム論などを概説している。ここでポPPERの反証可能性という基準にそぐわない『精神分析』を疑似科学の主要な例とした経緯を述べつつ、その後のアドルフ・グリウンバウムによる反論、クーンによるパラダイム論、デュエム-クワイン問題などの学説、ウィトゲンシュタインの「家族的類似性」の概念を示すことで、「線引き基準」を見出すことは容易ではなく、「精神医学は典型科学に十分類似した特徴を備えている」としている。

ここで、精神医学が通常の科学として見なしてよいかどうかについて、本書では以下の4つのテーマに焦

点を当てて論じている。すなわち、精神医学を他の科学から区別する4つの特徴として、①精神医学の主題には異議が唱えられていること、②精神医学は特殊な説明様式を用いていること、③メンタルヘルスの専門家たちは相異なる複数の枠組みで作業していること、④精神医学は価値や利害関心から問題のある影響を受けていることである。

そして、精神医学は実在するのかという議論から疾患の定義、すなわちDSMの問題に論が進んでいく。精神医学のもつ個別で複雑な問題、生物学的精神医学と精神分析以外にも社会的アプローチや行動主義的アプローチ、認知的アプローチも併存することなど、共時的に異なるパラダイムが併存している精神医学についてパラダイムの概念で説明している。

本書では精神医学は典型科学に十分類似した特徴を備えているかどうかについて肯定的に論じられて、精神医学においても他の科学と同様に科学哲学の概念が適用可能であることが示されている。ここで、科学哲学という視点から精神医学が科学になるための課題を明らかにすることが重要であるが、その主要な論点としてDSMによる精神疾患の診断や精神科薬物治療のRCTがあり、科学哲学からの視点が示されている。特に精神医学研究と利害関心に関しては価値負荷、証言管理というキーワードで信頼性が担保され、そのためにも新たな社会認識論が必要であるという著者の提案が述べられている。また科学哲学においても精神医学は他の科学と異なる面があり、新たな観点から科学哲学を見直す上でそのことは重要であり、精神医学と科学哲学が双方向的に有用であることが指摘されている。

本書を通読して以前はポPPERにより疑似科学とされた精神分析に代表される精神医学が新たな枠組みの中で見直され、科学哲学の発展を担う可能性が感じられた。精神医学と科学哲学の関係がより深まり、進展することによって資するものは小さくない。西田幾多郎の哲学は西洋と東洋(日本的なもの)の融合を模索したとされるが、日本的な視点でこの領域に光を当てることでさらに新たな発展につながる可能性も期待される。

(谷井久志)